南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語同窓会

2013年春　第16号
発行　南十字星会

連絡先　大阪府池田市五月丘 2-5-113-402
電話 Fax　072-753-1693
Email　rocky3@wombat.zaq.ne.jp

20年ぶりのジャワ ノスタルジー・ツアー

坂口　隆史　(1974卒)

2012年6月に諸般の事情から60歳で会社を退職したのを機に、8月にジャワを訪問してきた。約半月間のノスタルジー・ツアーであった。まずジョグジャカルタ・ソロを訪ねた後、スラバヤを訪問。最後はジャカルタに寄った。

私は1974年に大和銀行（現:りそな銀行）に入行し、1982年から約5年間ジャカルタにある合弁銀行に勤務。いったん帰国し国内支店を経験した後、1991年に再度インドネシアへ。この時は、当初3年間のスラバヤ駐在を経てジャカルタへ転勤し、最終1995年に帰国。1978年のインドネシア大学での企業派遣語学研修生時代を含め通算10年余りのインドネシア暮らしとなった。

特にスラバヤ時代は、当時唯一の現地駐在日本人として、それも家族帯同であったので、スラバヤ・ジャパンクラブや日本人学校のお手伝いなど公私共に多忙で、かつ充実した3年間を過ごした。今回の旅の主目的はこのスラバヤ訪問にあった。

市中央のTUNJUNGANプラザ界隈の高層ビル化。マクドナルドやケンタッキー、サークルKなどの外資チェーンの展開。車の洪水による交通渋滞など予想通り。残念であったのは、駐在当時親しくしていただいた日本人の方がほとんどおられず(20年も経っておれば当然だが）情報交換・収集もままならず、さらにタクシーと徒歩での移動では行動に制限があり、十分に今のスラバヤの顔が見られなかったことである。幸いにも現在の総領事が若い頃から親しくしていただいていた方なので、現地情勢をお伺いすることは出来た。

最も楽しみにしていたのは、私の元職場(大和プルダニア銀行: 現りそなプルダニア銀行のスラバヤ支店)訪問であった。20年前の支店開設時採用した女子職員が支店長（**写真、右から3人目**）となっていたのには驚くとともに、採用した立場としてうれしく感じた。女性の進出活躍ぶりは、さすがカルティニの国だなと納得。ちなみに今回の旅では列車やバスを利用したが、ジャカルタのバスウェイ(専用車線を走るエアコン付きバス。料金はやや高め）やジャカルタ・バンドン間の列車には、婦人専用の座席や車両（**写真㊦ボゴール駅で**）が用意されていた。ただ、辛口な感想を述べると、通勤電車の屋根にたくさんの人が乗っているのを目撃したが、運輸・交通政策上これらの異常な状態を改善することの方が、婦人専用車設置よりも優先されるべきかとは思ったが。

ところで、スラバヤを州都とする東ジャワ州政府は大阪府と姉妹都市の関係にあることはご存知でしょうか。その姉妹都市契約締結（1984年）の時、当時ジャカルタ本店勤務であったがスラバヤへ出張し、黒子役としてお手伝いをした。その調印式でのこと、予定時刻を過ぎても州知事一行がなかなか現れない。待っておられる府の方々のイライラぶりが伝わってくる。ようやく現れて、口にした第一声は「ジャランニャ　マチェット」。懐かしい思い出だ。

大阪府と東ジャワ州政府とは当初相互に知事が訪問するなどの親密関係であったが、その後やや下火になっていた。しかしながら、最近インドネシアが見直されるに伴い、インドネシア第 2 の商業・港湾都市スラバヤも改めて脚光をあびつつあるようであり、楽しみである。

スラバヤ時代の思い出を、もう 1 つ披露させていただきたい。華僑取引先を、担保に瑕疵があることが発覚したので、担保差し替え交渉のため現地職員帯同のうえ訪問した。突然社長が、部屋の鍵を掛け、コーラの瓶を振り上げ、迫ってきた。「日本人は我々インドネシア人、企業を食い物にしている。搾取している。この部屋でお前の身に何が起ころうとも、警察には目をつぶらせるから覚悟しろ!」。同行していた行員が「日本人のおかげで私たちは銀行業務を学び、今の私がいる。まずは私を殴れ」と身を挺してかばってくれた。その勢いに呑まれ、社長は瓶を下し部屋の鍵を開けた。別れ際に「日本人学校へ通っている 2 人の子供に気をつけろ!」の捨て台詞。結局 1 ヵ月ほどホテルに避難し、ほとぼりの冷めるまで、暫くガードマン(現職の警察官)を雇うこととなった。この行員の言葉、行動は今も決して忘れることができない。(㊦はスバラヤ市街地風景)

旅の最後のジャカルタでは、大阪外大インドネシア語科卒でかつ私の銀行時代の後輩たちと会い、半月ぶりの日本食を御馳走になった。安藤律男(79 年卒)、雪本肇(87 年卒)、斉藤史朗(89 年卒)の 3 氏である。彼らはそれぞれ地場銀行の頭取、外資系ファイナンスカンパニーの財務担当取締役、そして邦銀ジャカルタ拠点の次席と、同じ金融分野の、異なった職場で活躍されており、頼もしく感じた。

実は旧大和銀行へは大阪外大インドネシア語科卒業生が私の頃から数年おきに入行し、そのほとんどがインドネシア現地法人勤務を経験していたわけであるが、ここ 10 年以上前から入行が途絶えている。これはインドネシア語専攻の女子比率が増えたことも一因と思われるが、さびしいことではある。企業側にも海外駐在を前提とした積極的な女性の採用、登用が望まれる。

ボロブドゥールのご来光

彼らからホットな現地事情を聞かせてもらった。私がインドネシアにおけるスマートフォンの普及が日本以上であることや最新モデルの乗用車があふれていることに触れたところ、情報関連機器の使用については、インドネシアが進んでいるというよりも、日本が遅れている。また、乗用車の普及に対しては、インドネシアのいわゆる一流企業社員の所得が今や日本並みの水準まで上昇。マイカーやマイホームもかなりの取得率とのこと。さすれば、市内のビジネス街に多くのサラリーマンが郊外のマイホームからマイカー通勤して、交通渋滞が悪化するのは当たり前というわけである。

日本を外から見て 3 氏の危惧するのは、日本はあらゆる面で発想と行動をドラスティックに変えないと、いわゆるガラパゴス化に陥るのではということであった。進出、投資案件への対応においても、日本企業の機関決定には他国に比し著しく時間を要しており、チャンスを逃しているように思えるとの指摘であった。

旅を終えて思うのは、インドネシアの社会のひずみ、ギャップがむしろ大きくなつているのではないかということだ。具体例として、先に述べた情報機器や乗用車の目覚ましい普及・発展の一方で、平気で穴があいている道路、道端の生ゴミの悪臭のひどさ、歩行者が道路を横切るのが命がけという交通事情とマナー、まだ見かける物乞いのひと、等々の相変わらずの実態。

中国を論ずるに、国内の極端な貧富の差が政情不安の大きな要因とされているが、インドネシアもその轍を踏むのではないかと心配する。

ジャカルタはシンガポール並みのショッピングゾーン化を目指しているそうである。実際に市内の各プラザの外観内装の素晴らしさには驚かされるが、社会的安定のためには何よりも地道なインフラの整備が望まれると痛切に感じた。

2012 年 10 月の新聞報道では、インドネシア首都圏整備のインフラ開発計画で日イ両政府が合意したとのこと。プロジェクトの早期実施を期待したい。

ジャカルタ発

ハンセン病が つないだ出会い

髙島 雄太　(2012 卒)

インドネシアでの活動

2012 年 10 月、私はジャカルタ近郊にある日系企業の現地採用社員として働き始めるためインドネシアに降り立った。体にまとわりつくじっとりとした空気と丁子タバコの甘いにおいがインドネシアに来たことを改めて感じさせる。

最後の大阪外大入学生として 2007 年にインドネシア語科に入学した。それから 5 年半、1 年の休学と半年の留年を経てインドネシアで働くこととなった。思い返せば、インドネシアで働くということなど私を含めて誰も想像もしていなかったことだろう。

インドネシアで就職するまでの道のはじまりは、中国にあった。大学 1 年時、中国のハンセン病快復村でのワークキャンプ（労働奉仕のボランティア活動）と出会った。病気が治った後もハンセン病快復者に対する差別は根強く残り、隔離された山奥の小さな村に住んでいる人々がいる。そこで日中の学生が 2 週間ほど滞在し、道路舗装や水道設備を整える労働作業を行いながら、村人とお茶をし、寝泊りする。そんな活動だった。最初は恐怖心のほうが大きかったが、身振り手振りを交えながら言葉が通じたときの喜び、そして自分のことを大切に迎えてくれる村人に惹かれ、長期休暇のたびに中国へと渡っていた。

初めてインドネシアを訪れたのは大学 3 年の時だった。日本財団による ASEAN ハンセン病会議がジャカルタで開かれるということで、中国での活動を本格的に始めた日本人に同行する形で参加させてもらったのだ。会議の後、ハンセン病快復コロニーを 4 カ所訪れた。中国でのワークキャンプの話をすると、「ぜひインドネシアにワークキャンプを持ってきてほしい」と答えてくれた。

「1 人で死ぬのが怖い」。中国で出会ったロン婆(写真㊧)のこの言葉を私は生涯忘れないだろう。かつてハンセン病を患い、若い頃から小さな村で暮らしてきた。年々体調を悪くし、小声で洩らす彼女の言葉に、私は何も返すことはできなかった。

彼女に見てもらいたい世界がある。それは、ハンセン病快復者が隔離され 1 人で死んでいくことのない世界だ。少しでもそんな世界を創ることができれば…。その思いを胸に 2009 年から 1 年間インドネシアのハンセン病快復コロニーに住み込んだ。

彼らは自分の過去についてあまり多く話そうとしない。快復者であること、自分の親が快復者であることを周りに見せないように暮らしている。快復コロニーの中だけが隠しごとをする必要のない世界のようだった。そこに突然やってきた私を、彼らは中国と同じように暖かく迎えてくれた。住む場所を探してくれ、食事の世話をしてくれた。そして少しずつ自分たちの過去を話してくれるようになった。

彼らと生活を共にすると同時に、インドネシア大学の学生を巻き込んでのワークキャンプ活動を始めた。2010 年 2 月には UI 日本語学科の大学生を中心として、ハンセン病快復コロニーでのワークキャンプ団体、Leprosy Care Community (LCC)を立ち上げた。当初 11 人から始まった LCC は毎夏、東ジャワの快復コロニーでワークキャンプを行い、これまで日イの学生が 100 人程参加している(横断幕を掲げた集合写真は、昨年のキャンプ時)。「最初は恐ろしい病気だと思っていた」と述懐する学生も少なくない。しかし、“一緒に汗を流し、同じ釜の飯を食い、一つ屋根の下で寝る”活動の中で、彼らに対する認識は次第と変わっていく。「村人の笑顔を見ると、自分の悩みがすごく小さいものに思えてきた」。学生はワークキャンプが終わった後も頻繁に SMS で連絡を取り合う。

ハンセン病というものに出会わなければ、私がインドネシアに来ることはなかっただろう。中国の山奥での村人との出会いが、今も私の人生を導いてくれる。現地採用(自動車関連部品工場の営業)としてインドネシアに身を移した。そして休日のたびに村人に会いに出かける。

インドネシアの村人と共に私は歩いていく。

キャンパス便り

准教授　原 真由子
（外国語学部インドネシア語専攻担当教員）

語劇祭

語劇の上演は、大阪大学との統合後は豊中キャンパスの学園祭「まちかね祭」に合わせて、語劇祭として箕面キャンパスで行われています。今年度は 11 月 3、4 の両日。インドネシア語専攻は、例年通り 2 年生が中心となり、劇作家プトゥ・ウィジャヤ(Putu Wijaya)作の“Bila malam bertambah malam”という、バリを舞台とした劇を上演しました。

バリには出自に基づいた社会階層であるカーストが見られ、バリの社会と文化に密接に関わっています。劇はそのカーストによる身分差と結婚の問題を描いています。バリ社会では一般的に同じカースト間の結婚が期待され、平民層と貴族層との間の結婚、特に女性が貴族層で男性が平民層の結婚は、現在はそれほどではないですが、反対されることが多いです。

主人公の 1 人である貴族層の女主人はかつて平民層との男性との愛を捨て、同じ貴族層である亡き夫と結婚しましたが、

2012 年秋の語劇祭。バリを舞台に社会問題を絡めた劇を熱演した

息子が平民層の使用人と結婚したがっていることを知り、大反対します。テーマはシリアスですが、所々にコメディー的な場面と台詞が見られ、学生たちにとってその違いを演じ分けるのが難しいようでした。また、台詞は基本的にインドネシア語であるものの、カーストの違いを示すために時々バリ語の人称詞や呼称が使われており、背景となる身分関係を含めてその意味を理解し、暗記するのが大変だったようです。

今年度の語劇祭には、25 専攻語のうちインドネシア語専攻を含めて 17 の専攻語が参加。劇の後、先輩たちの蓄積を生かして今後も継続していこうと皆で話し合っていました。

スピーチコンテスト

今年度は、インドネシア語のスピーチコンテストが同じ日（11 月 10 日）に神田外大と南山大で開催され、インドネシア語専攻の学生は両方に参加しました。

まず、神田外語大学主催のコンテストで、カテゴリーA（インドネシア語学習歴 2 年以内の大学生）の部に 2 年生の山本幸己さんと 1 年生の松本祐季さんが参加しました。山本さんは、共に地震多発地域であるインドネシアと日本の間で知識経験を共有する重要性についてスピーチを行い、カテゴリー 1 位を獲得しました。松本さんは、災害、医療福祉など多くの分野におけるインドネシアと日本の関係強化のために、自身がよりインドネシアについて学び、将来政府機関で働くことで貢献したいという希望を述べました。彼女は 1 年生ながら、より上のカテゴリーの B と C の参加者をおさえ、総合優勝を獲得しました。副賞の航空券で春休みにインドネシアへ旅行に行くそうです。

一方、南山大学で開催されたコンテストでは、詩の暗唱部門とスピーチ部門の 2 部に分かれ、暗唱部門に 1 年生の的野加奈さんと後藤英知さんの 2 人が参加しました。詩はインドネシアで既に発表されている作品がいくつか課題詩として用意されており、その中から選びます。

的野さんは、“Dalam doaku”(Sapardi Djoko Damono 作)、後藤さんは “Satu”(Sutarji Calzoum Bachri 作)を読み、的野さんが 2 位に入賞しました。2 人とも詩の解釈の難しさを実感し、詩が持つ、単に伝達するだけではない「ことば」の側面に触れることができたのではないかと思います。

卒論発表会

今年度は、11 人が卒業論文を執筆し、1 月 29 日にその口頭試問を行いました。試問は公開、卒論発表会も兼ねています。後輩たちが見守る中、スライドを使って卒業論文の内容を発表し、教員と質疑応答。テーマは、政治、宗教、歴史、芸術、言語など様々です。

例えば、「Ber 動詞の名詞語幹に関する考察」「ベニャミン S を通して見るブタウィ文化」「ハラール認証の現状と課題」「インドネシアのイスラム映画にみる女性の姿」「インドネシア・バリにおける伝統呪医バリアンの治療と役割」「スハルト体制以降のインドネシア華人研究」「カルティニ姉妹—妹たちの生き方」

などです。卒論準備に早く取り組んでいても、時間が足らなかったとか。でも、卒論執筆を通して、ある 1 つのトピックについて客観的に考察し、比較的長い文章を書く良い訓練になったはずです。

≪教員の現在の研究から≫

2つの交流事業

教授　松野　明久

外国語学部インドネシア語専攻を離れ、国際公共政策研究科（学部は法学部国際公共政策学科）に籍を置いて早5年が経つ。今回はその後の近況報告という意味もあるので、インドネシアとオランダについて最近している仕事について書かせていただきたい。

アチェの大学との交流事業

2011年、文科省の大学国際化事業の1つである「大学の世界展開力強化事業」に国際公共政策研究科が採択され、「アジアの平和と人間の安全保障」というテーマの下、大阪大・広島大・長崎大・名桜大（それぞれ特定の研究科）と東南アジア5大学（同じく特定の研究科・学部）が5年間の学生交流事業を行うことになった。

インドネシアの提携校はアチェのシアー・クアラ大学法学部(写真)政治社会学部である。交流事業では毎年1回、東南アジアのいずれかの提携校で短期学習プログラム（2週間）を実施してもらい、それに日本の4大学の院生を送り込むのだが、昨年はシアー・クアラ大学にそれをお願いした。内容はシンポジウム・講義・フィールドトリップなどから構成される15回分の授業に相当する学習で、すべて英語で行われた。

学生たちは、アチェの和平プロセスを博士論文のテーマにしていた学生（広大）を除けば、インドネシアを専門にしてはいない。そうした学生を対象に事前学習を行い、プログラム中付き添い、講義の補足説明を行い、彼らの質問に答えるというのが引率教員たる私の仕事だが、スケジュールの確認から毎日の食事、会計処理までしなければならないので、実際には添乗員といった方が近いかも知れない。

それでも、学生たちとホテルのロビーで夜遅くまで話をするのは楽しいし、なんといっても、学生たちの学ぶ姿がよく見えてやりがいも感じられる。学生たちはプログラムの最後に英語で短い発表をすることが義務づけられており、数人には英語でエッセーも書いてもらった。

また、学生は半年の東南アジアの大学への交換留学を行うことができ、シアー・クアラ大学には阪大から院生1名が留学した。

（国際公共政策研究科のHPの「アジアの平和と人間の安全保障」のコーナーに事業の紹介があり、英文エッセーは英語ページに掲載されている）

適塾記念センターオランダ学部門

インドネシア研究者がオランダに行くのは、昔は当たり前だった。私も1980年代に2年ライデン大学に滞在した。そのこともあって、阪大が適塾記念センターを設立し、そこにオランダ学部門を設置した際、その兼任教員となった。オランダ学部門は、かつて蘭学者たちがオランダ（語）を窓口として、西洋の知識を求めた知的探求の精神を復活させようという趣旨で設置された。

昨年は、阪大が交流協定を結ぶグローニンゲン大学(写真㊦=大学本部棟)から、阪大で講義をもちたいとの申し出があり、適塾記念センターの協力の下、国際公共政策研究科で引き受けて「Gateway to Europe」（新オランダ学講座）と銘打った科目を開講した。グローニンゲン大学の教員が英語で集中講義を行い、単位を付与するというものである。

今のオランダに何が学べるのか。オランダは、自由主義と個人主義を重んじる一方、寛容な社会で知られ、社会保障が充実し、人道主義・国際協調を基軸とした外交は独自のポジションをもつ。安楽死、マリファナ、売春の合法化、ワークシェアリングなど大胆な社会的実験でも知られる。世界一子どもが幸せな国と言われ、1人当たりの自転車保有台数は世界一を誇る。最近はユーロ危機に伴う経済の低迷、移民排斥の動き拡大などオランダの状況も変わってきているが、それでも学ぶべき制度があるのではないかと思う。

寄稿　*Apa & siapa*

インドネシア語の水辺にて

服部　英樹　(1956 卒)

この度、思いがけなく南十字星会会報編集部より、お声をかけて頂いた、S31 年イスパニア語卒の服部英樹と申します。南十字星会は、長い間、私自身ひそかに“準会員”の気持ちで、憧れと懐かしい気持ちを抱いていた、同窓の集いの場でありました。イスパニア語部の逍遥歌に「…、森の梢に、影宿す、南十字の星座こそ、わが魂の故郷よ」とあります。こと、志と違って、アマゾン河のほとりで、南十字星を、の夢は果たせませんでした。しかし、ご縁があってインドネシアの島で、南十字星を仰ぎ見る機会に恵まれました。当時、錫鉱山で有名だったバンカ島を訪れた折りに、清冽な夜空、椰子の梢に煌めく南十字星は、忘れがたい心象風景となって、今も私の胸中に、輝いています。

安宅に入社後、数年の間は、日本で“3 番目”位の、イスパニア語の達人になることが、私の人生の目標でありましたが、独身時代に、イスパニア語圏ではなく、マラヤのクアラルンプールに赴任すると、3 日にして私の人生観は、いとも簡単に変節しました。イスパニア語に代わり、東南アジアに住み、中国料理を常食とすること、など等が私の新しい人生の目標となりました。

そして、マラヤより帰国後、所属部署でジャカルタに、合弁企業設立の案件が生まれた折りに、自ら志願して再度、念願の東南アジアに、戻りました。

「インドネシアは、地球の、はずれか?」との問いに、「いや、地球の外だ」と誰かが答えたという、小話を耳にしたのは、それより、ほんの数年前のことでした。私とインドネシア語とのご縁は、これより、始まりました。35 歳になっていました。(写真は往時のジャカルタ。M.H.Thmrin 通りの洪水被害)

アイプ・ロシディ氏ご夫妻と一緒に。氏が主催したジャカルタの絵画展で。左端が筆者=1993 年 7 月

このあたりで、インドネシア語について、現地での経験を通しての、私なりの感想を少し、述べてみます。

1.　インドネシア語は“否定語”のない言葉である

インドネシアでは、人々が、話し相手や対象の事物を、直接否定したり、“否定的に”表現することは、まれでしょう。このことは、人々が、互いに相手の感性や感情を尊重して、人の心を傷つけることを、できる限り避けたいとの思い、配慮に由来しているのでしょう。“tidak”ではなく、“kurang”の表現を選んで、直接否定と、拒絶を回避する人達なのです。

外国人学習者にとっては、否定的状況を、いかに否定的表現を避けて、しかも、正確に伝達できるかが、学習の始発駅であり、また、終着駅でもあろうと思いました。

2.　インドネシア語は低音の言葉である

街中でも屋内でも、人々が声高に、或は、声を荒げて話すのを聞いたり、見かけたりすることは、まれであります。職場で、上司が部下に接するのも、低音が基調です。第 3 者の頭上を越えて、言葉が飛び交うのは、粗野(kasar)の象徴でもあります。文法的には、接頭辞により、動詞の語頭が語韻変化することも、インドネシア語の低音発生に寄与しているのでしょうか。インドネシア語の“音”“響き”“リズム感”については、松浦健二先生の『インドネシア語入門』(泰流社刊)の「前書き」を、ご一読頂きたく存じます。

3.　インドネシアの官僚は、日本の駐在員とインドネシア語で話すのを恐れる

その理由の１つは、日本側の話者が、使用しがちな否定語の表現によって、自身の感情が傷つくことや、面子を失うことを恐れるからでありましょう。例えば、業務上の断りの言葉としては「ingin menampung dulu」のように、肯定形で断りの意を表すことで、互いに傷のつかない方法もありましょう。日本語の「伺っておきましょう」の語感でしょうか。いまひとつには、インドネシア側の言葉が、その中の、動詞の部分のみが主体的文章として、際立って理解され、インドネシア語が本来的に内臓している「bayangan」(投影像)が、日本本社への伝達の過程で失われることを懸念することも、一因かと思います。

インドネシア語について、このような印象と共に帰国した時には、55 歳になっていました。

現役時代、何もインドネシアのお役に立てなかった私でありますが、引退後、自分でできる何かとの思いから、作詞したのが「バリ賛歌」であります。バリ観光の一助になれば幸いですが、私が歌唱すると、観光客も減少しますので、紙上にて紹介させて頂きました。

末尾になりましたが、この拙文の表題は、会報「南十字星」第 9 号、粕谷俊樹氏の「インドネシア語の海を漂って」より拝借しました。もし、私に、来世があれば、水辺を離れて「インドネシア語の大海」に、心も新たに船出したく思う、今日この頃であります。

ジンバランの海に舞う踊り子。椰子の木の後ろは断崖になっており、海が迫る。ガムランの演奏で舞ってもらった＝2012 年 3 月

Anugerah Cinta Bali

1. Pulau Bali, pulau bersemayam dewa dewi, sang matahari
sedang terbit-lah,
Angin laut Jimbaran, bertiup-tiup kencang, sebuah bayangan sepeda-motor,
ngebut berlari-lari.
Hembusan napasmu, alangkah terasa bergelora, terburai, rambutmu hitam
pekatnya mengalir, berkilap-kilap.
Wangi mu-lah, menghirup aku dalam-mendalam, harum itu-lah, wangi kau,
si gadis Bali, kurindu-rindunya.

2. Cermin air, warnanya hijau, berpantulan angkasa Bali,
tanjak-menanjak tak henti-hentinya.
Harap-harap kau masih kenal-mengenal, adanya sebidang sawah padi.
Tahunnya, tahun yang lalu, musimnya menjelang saat-saat inilah.
Padi-padi sawah itu, airnya mengandung sepasang matamu, harumnya,
alangkah terasa biru-birunya.

3. Menelusuri rimba Ubud, aku mengenang malam berbintang, yang cerah itu.
Irama gamelan, melantunkan nada cinta, abadi nan langgeng.
Kedua buah bibir saling sambut-menyambut, satu sama lain.
Ciumanmu yang pertama malam itu, citra rasanya, masih hijau-mudanya
buah mangga itu.

4. Menengadah kepalamu, memandang, puncak gunung, yang sana itu.
Maha kuil, nama-Mu, Gunung Agung, ajak-mengajak kita berdua.
Berhadapan dewa-dewi Bali, menjelang malam ini, sembahkan-lah kita,
panjatan sumpah, sumpah Bali.
Tak lain adalah sebuah lagu, anugerah cinta, cinta Bali,
tak kunjung padam selama-lamanya.

バリ賛歌

1.　神々の島、バリ、バリに、朝陽は、昇り
ジンバランの、海風を、バイクは、駆ける
熱き、君が、息吹き、流るる、黒髪
心に、沁みる、懐かしき、君が、バリの、香りよ

2.　バリの、空を、映して、どこまでも、昇る
緑の、水鏡(みずかがみ)、覚えているかい
去年の、今頃、きらめく、水面(みなも)に、
君が、瞳を、宿した、水田(たんぼ)の、蒼き、香りを

3.　ウブドの、森に、思い出すのは、星の夜
ガムランの、奏でる、とわの、愛の、調べに
初めて、寄せた、ふたりの、くちびるに
君が、残した、いまだ、青き、マンゴの、移り香よ

4.　見上げてごらん、あの、山の、頂きに
ぼくらを、招く、グヌングー　アグングーの、大社(おおやしろ)
バリの、神々に、晴れて、こよい、誓うは
とこしえに、変わらぬ、バリの、愛の、賛歌よ

長年、家族のために安全運転をしてくれた、マスリー氏（左端）の一人娘、マリアさんの結婚式に出て＝ジャカルタ

《編注》服部さんはインドネシア語に関し、粕谷俊樹さんとの共著で「現代インドネシア語商業文」(1989 年大学書林)「新聞のインドネシア語」(1993 年同)など 3 冊と単独で「インドネシア語−日本語　技術・工業用語辞典」(2005 年国際語学社) など、計 6 冊を出版しています。この会報では広範な人々との交流を目指しており、趣旨を説明して、執筆をお願いしました。

特別寄稿 *Apa & siapa*

Belajar dari Kegagalan

Ryanto Thee
(2013 工学部→大学院)

大阪大学の留学生の友達

2008 年 4 月に日本へ来ました。日本を選んだのは、文部科学省の奨学金がもらえるというのが大きな理由でした。それまで教育費を出してもらっていた親には、もちろん感謝しており、以後はできるだけ負担をかけないようにしようと決めたのです。そして、アジアの先進国である日本に行けば、たくさん学べる。そう信じてきました。

母国を離れたことは 1 度ありました。でも、たった 1 週間の家族旅行でした。日本へ来る前ずっと家族と一緒に暮らしてきた私は、初めての日本がとても不安でした。更に、日本へ来ることになった同級生の中でも知り合いがいませんでした。しかし、日本ではきっと独立してやっていけると考えながら、意思を固めていました。

最初の 1 年目は、大阪大学外国語学部日本語日本文化教育センターで日本語日本文化を学びました。ここで、大学に入るための準備、日本語や物理学や数学の勉強をしました。振り返ると、この 1 年間は私にとって、とても貴重なものとなりました。初めて親元から離れて、料理や洗濯など、いろいろなことを自分でしなければなりません。初めてづくしのことがらでも、何とか乗り切れました。正直、自分でも随分成長したと感じる 1 年でした。

また、インドネシアだけではなくて、マレーシア・タイ・ベトナム・韓国・インド等いろいろな国の人と日々を暮らす中で、世界の広さを感じました。人との交流チャンスは、とても貴重な経験です。そして、日本で多くのことを勉強した中で、一番大切なことは「失敗から学ぶ」ことだと思います。

研究室に所属して、社会人ドクターの先輩と一緒に研究を行っています。研究のことだけではなくて、人生の生き方や考え方も指導を受けました。この時「失敗から学ぶ」という言葉が深い意味を持っているのをつくづく感じました。

実際に研究を行っている中で、失敗を積み重ねて研究を成功させる。そんな経験を通じて、言葉の深さ知りました。この言葉は、日本の経済や技術成長のカギなのではないでしょうか。「どうやって成功するか」という書籍は多く市販されていますけれども、その本に書かれていることは成功に至る要因の一つに過ぎません。実際に成功する要因が多くて、失敗を通じて一つ一つの要因を把握することができます。まさに「失敗は成功の第一歩」なのです。

いろいろな経験と成長は日本人の皆様のおかげ。特に指導を受けた先輩に感謝します。（**左の写真はフットサルをした後、研究室メンバーと。前列㊨から 3 人目が筆者**）

Salah satu tujuan saya datang ke Jepang adalah belajar dari orang Jepang yang berhasil membawa negara mereka menjadi negara yang makmur dan begitu maju di dalam dunia teknologi. Pertama kalinya saya dapat merasakan suatu prinsip yang membawa Jepang maju adalah ketika menjadi anggota sebuah laboratorium untuk melakukan penelitian di universitas. Sambil melakukan penelitian saya mendapat bimbingan dari salah seorang senior yang sedang kuliah sambil bekerja. Yang dapat saya rasakan berbeda dari senior tersebut adalah adanya sebuah prinsip yang mendasari cara bekerja sehari – hari. Salah satu prinsip yang paling berkesan bagi saya adalah “Belajar dari Kegagalan”. Saya yakin bahwa inilah salah satu prinsip yang membawa Jepang menjadi salah satu negara yang paling maju di dunia. Saya sangat berterima kasih terutama kepada senior saya sehingga saya bisa merasakan langsung pengalaman yang sangat berharga ini.

寄稿　*Apa & siapa*

忘れられない想い出

大野　泉　（1979 卒）

【自己紹介】

1979 年に大学を卒業し、オートバイの専業メーカー「ヤマハ発動機」に入社し、34 年間アジア各国でのオートバイ現地製造販売事業を主に働いてきました。ここ 8 年間は、米国と日本に製造拠点を構えるゴルフカート事業に従事していますが、勿論、訪れて一番ホッとするのはインドネシアです。

【インドネシアでの業務】

大学卒業後、4 年目にオートバイの現地営業としてジャカルタに足を踏み入れてから、家族帯同で Jakarta 駐在した 6 年間を含めて、西はスマトラ・アチェから、東はイリアンジャヤまでインドネシアの全国津々浦々まで回りました。

スマトラ人は粗暴、ジャワ人は穏やかというのが通常の理解ですが、私にとってインドネシア人は全て恥ずかしがりやのフレンドリーな人種です。

‘90 年に外資が初めてマジョリティーを取ったオートバイ販売会社の認可を受け、日本人主体の経営に携わりました。‘90 年初頭の外資導入策と高度経済成長、更には開放政策に恵まれ、テレビコマーシャル、新聞雑誌を活用しオートバイの拡販に尽力しました。

オートバイ新商品の開発、マーケティング販売策等、全てが上手く回り、楽しい日々を過ごしました。

特に、‘96 年には当時のスハルト大統領の三男トミーのサポートによるスンツゥールのサーキット場が開業し初めてのワールド Moto　GP を誘致。ヤマハ専属の日本人ドライバーが優勝したのは楽しい想い出の一つです。**（写真Ⓔ、正面左端に筆者）**

【サッカーのサポート】

仕事以外にもゴルフは勿論、スキューバーダイビング等楽しみましたが、一番記憶に残るのは、`94 年サッカーワールドユースのアジア予選の決勝です。当時、

日本蹴球協会は、2002 年のワールドカップ世界大会の日本誘致を目標に J リーグを立ち上げ、若年層からの強化を図っていました。

その強化策のワールドユース（U－19）のアジア大会がジャカルタで開催され、当時の日本人倶楽部のサッカー部会長を務めていた私は大使館、日本人会と連携してチーム応援しました。

中田（後、イタリアセリエ A）、松田（後、横浜マリノス）、楢崎（後、名古屋グランパス）等、日本サッカーを世界に羽ばたかせたビッグネームがまだ高校生で、試合前後に日本人学校で子供たちと一緒にボールを蹴ったのも忘れられません。**（写真、中央）**

【クラスメイトとのつながり】

駐在当時は、大学のクラスメイトの 7 割がインドネシアに駐在しており、公私にわたった家族付き合いをしました。大学で教えて頂いた磯浦先生も、パダンで日本語を教えられていて、Jakarta で先生を囲んで同窓会を開催しました。

【インドネシアに期待すること】

リーマンショック以降、世界は政治的にも経済的にも中国の影響が大きくなる中、私の携わる製造業は『中国＋１』といわれています。

つまり、中国への進出一辺倒であった「もの造り」が、政治的にも、経済的にも、見直しがされているなかで、インドネシアへの投資が増え、日本との繋がりが強化されることを期待しています。

外大インドネシア語を卒業したことにより、経験豊富かつ深い見識を持たれた先輩、後輩に恵まれ、公私共に援助して頂いていることを日々感謝するこの頃です。

実は、この原稿を書いた後に、東南アジア出張を計画しており、Jakarta 駐在のクラスメイトとプチ同窓会をしようとワクワクしています。

久しぶり!　和やかに

2012 年度 南十字星会 総会

南十字星会の 2012 年度総会が、10 月 27 日正午から大阪・北区のラマダホテル大阪で開かれた。出席者は 45 人。先生方や多くの現役学生を迎え、先輩・後輩が和やかに歓談した。

☆☆　総会式次第　☆☆
2012 年 10 月 27 日正午～
ラマダホテル大阪

【第 1 部】
開会の辞・司会　片山　秀樹（90 卒）
物故会員への黙祷
会長挨拶　宮崎　衛夫（65 卒）
来賓挨拶　教員 原　真由子
先生方のご紹介
ゲスト・ロウリさん　ご紹介と挨拶
乾杯　西村　耕二（56 卒）
****食事・懇談****
【第 2 部】
司会　高田芳博（07 卒）松本晋(08 卒)
関東支部長挨拶　渡邉　悠三（69 卒）
ジャカルタ支部便り　司会者
会報報告　岩谷　英志（64 卒）
参加者の
「ショートスピーチ」

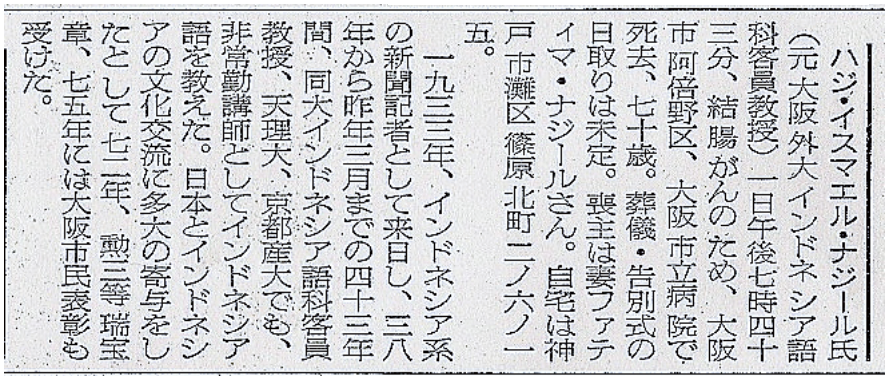
在学生紹介
歌唱指導　渡辺　重視（64 卒）
閉会の辞　小原　一浩（63 卒）
写真撮影

総会は 2 年に 1 度の開催。かつて 43 年間、母校で教鞭を執っておられたイスマイル・ナジール先生（30 年前に亡くなった）のお孫さんが今、同じ大学の大学院で学んでいる。不思議な“縁”。そのお孫さんのロウリ・エステル・パサリブさんには会報 15 号にご執筆願ったが、総会にもお招きし、恩師の思い出を語り合いながら故人を偲んだ。

今回は余興のイベントを特に設けず、第 2 部での「ショートスピーチ」をメーンにした。参加者の出来れば全員に、マイクを回して各自ひとことずつ喋っていただく趣向。しかし、皆さん話がどうしても長くなる。閉会予定時刻をオーバーしそうで、司会者はひやひや（次回はもっと余裕を持った時間設定をしなければ…）。最後は恒例のインドネシアの歌の大合唱で、名残を惜しみながら締めくくった。

消息　ひとこと（敬称略）

1982 年 12 月 2 日付け朝日新聞朝刊（大阪版）



ハジ・イスマエル・ナジール氏（元大阪外大インドネシア語科客員教授）一日午後七時四十三分、結腸がんのため、大阪市阿倍野区、大阪市立病院で死去、七十歳。葬儀・告別式の日取りは未定。喪主は妻ファティマ・ナジールさん。自宅は神戸市灘区篠原北町二ノ六ノ一五。

一九三三年、インドネシア系の新聞記者として来日し、三八年から昨年三月までの四十三年間、同大インドネシア語科客員教授、天理大、京都産大でも、非常勤講師としてインドネシア語を教えた。日本とインドネシアの文化交流に多大の寄与をしたとして七二年、勲三等瑞宝章、七五年には大阪市民表彰も受けた。

東郷芳温（44 卒）=千代田区
会報 15 号にロウリ・エステル・パサリブさんの寄稿。イスマイル先生のお孫さんとの記事で驚いた。戦後、復員の後、内藤先生とイスマイル先生を淡路島に招待して、食糧難の災を 4～5 日癒してもらった事がある。やさしい、男前のイスマイル先生を偲びます。

井上安寛（48 卒）=兵庫県
85 歳。体力が衰えステッキで歩行も困難。皆さんの記事を読ませて頂き、懐かしい高槻校舎を思い出し、感慨にふけっています。

石川欣也（49 卒）=奈良県
いつも老生を啓発くださり有難うございます。外出する機会が少なくなりましたので、活字が何よりの心の栄養素です。

水谷　貢（50 卒）=箕面市
近頃は体調がすぐれず、自宅周辺を歩く程度にしています。

河合由男（51 卒）=滋賀県
おかげさまで私の体は丈夫です。ばあさんがボケていますので、その世話をしながら庭の手入れをしたり、屋敷の草むしりをしたりして暮らしております。

磯田良一（55 卒）=さいたま市
まだ現役。週 5 日ぐらい近くのプールで水泳を楽しんでおります。

山口　寛（58 卒）=枚方市
元商社マンとして印パに始まり東南アジア、西アフリカに駐在。それが縁となり半世紀余過ぎた今も、第 2 の故郷(タイ)との往来を、現役世代並に楽しんでおります。

前田正一（59 卒）=神奈川県
ボランティア活動（通訳、日本語教育）を中心に、元気に過ごして居ります。

西田達雄（60 卒）=調布市
編集者のご尽力に深謝。同窓会誌定期発行に誇り。インドネシアの成長・発展が ASEAN をリードします。

林　喜久雄（60 卒）=神戸市
全関係者一丸となって、インドネシア語科の定員増にラッシュ!

道廣健吾（61 卒）=大田区
いよいよ後期(高貴ではありません)高齢者の仲間に入りました。暑かったり、寒かったり気温の変動が激しいですが、何とか無事に過ごしております。

石川恵二（62 卒）=横浜市
前号のロウリさんの寄稿文を懐かしいような気持ちで読ませていただきました。私がナジール先生宅にお訪ねしたときファリダさんは中学生でした。

堀田　実（63 卒）=千葉県
1 人生活にもリズムが出てきました。今、料理に凝っています。ただ、年のせいか、ゴルフのスコアが悪くなり始めました。

小西新平（64 卒）=栃木県
15 号の辻修司さんの寄稿文、懐かしく読みました。東京の懇親会でのカンツォーネも聞けず、残念でした。

本田正伸（69 卒）=兵庫県

1 年余のホーチミンでの仕事を最後として 2012 年 4 月に帰国。海外リピートステイを楽しんでいます。

渡邉悠三（69 卒）=千葉県
2011 年の大震災直後、千葉大マスターコースを終えて、翌 12 年 6 月から JETRO に Adviser として勤務。

山崎　訓（71 卒）=埼玉県
まだ現役でガンバッテおります。株式会社ラオパン。

塩見　澄（72 卒）=千葉市
2012 年 6 月末に通算 13 年間のジャカルタ勤務を終え帰国。同時に住友化学を退職し、悠々自適の生活に入りました。

阿部直子（74 卒）=千葉県
いつも会報を楽しく読ませていただいています。

勝原紀美代（75 卒）=広島県
ロウリさんの特別寄稿を読み、ナジール先生のことをとても懐かしく思い出しました。「ブンガワン・ソロ」の歌をナジール先生に教えてもらい、今も覚えています。故郷を想いながら歌っておられたのでしょうね。

勝田英紀（82 卒）=大阪市
最近は年 1 冊のペースで出版を続けており、2013 年は『貿易英語ガイダンス（仮題）』を出す予定です。

里　真吾（02 卒）=留守宅・大阪市
写真の通りの風景はスマトラ島中部リアウ州の州都プカンバル(Pekanbaru)です。2012 年 12 月に日本語教師としてこの赤道直下に再度渡航。「そこそこ田舎で、そこそこ都会」という感じです。(中央分離帯を挟んで道路幅はかなり広い。駐車自動車の歩道脇に、単車がずらり。通りのビルには時計店がある。「シチズン」「セイコー」、手前には「スマホ」「タブレット」などの看板。少し離れたところに「ケンタッキーフライドチキン」の店も)。

梶田諒介（12 卒）=京都市
京都大大学院のアジア・アフリカ研究科で勉強を続けています。

◆おくやみ申し上げます◆
訃報が届きました
瀬尾禎一(62 卒)=千葉県 12 年 12 月

ひとこと　消息